

ゴットフリートの「トリスタンとイゾルデ」

—リヴァリーンとブランシェフルール—について

Gottfrieds >> Tristan und Isolde <<

—Über Riwalin und Blanscheflur—

齋藤 芙美子

Fumiko Saito

(1)

研究論集23巻で試みた「プロローグ」の分析ですでに述べたように、ゴットフリートは「こころ気高い人々の、私が愛着をおぼえる人々の、私が心寄せる人々の楽しみのために」¹⁾物語ろうと語っている。そのような人々は「快い苦しみ、貴い悲しみ、心の悦び、愛の苦しみ、悦びの生、苦しみの死、悦びの死、苦しみの生」²⁾を知る人たちであるから、「彼らが私の物語で苦しみの心痛を半減できんがため、その苦悩を和らげんがため」³⁾にゴットフリートは物語ろうとしている。そして「純愛をあかしたてた人たち」⁴⁾の恋物語を語る理由は「愛はととも祝福されたものであって、幸せになるための骨折りであるゆえに、だれも愛の教えをうけずには美德も名声も手に入らない。愛がつくりだす多くの価値ある生活、愛からうまれる多くの美德を考えれば……生きとし生ける者がすべて心からの愛を求めて努力し」⁵⁾なければならないからであると詩人は主張する。

「愛の苦しみを体験しなかった者には、愛の悦びも与えられはしなかったのだ。悦びと苦しみはいつでも愛にあっては切り離されはしなかった。この二つを合せもってこそ人は名声も称賛もえられるのであって、この二つがなければ駄目になるにちがいない。この恋物語に語られている主人公たちが、もしも悦びのために苦しみを、心の悦びのために恋の悲しみを胸に抱いていたのでなければ、彼らの名前も彼らの運命もこんなに多くのこころ気高い人たちを幸せにもしなければ、悦ばせもしなかったろう」⁶⁾というゴットフリートの純愛讃歌を聞くと、読者はこの恋物語の「愛の教え」を一刻も早く受けたいと心逸らせることであろう。

このような読者の逸る心のみたすかのように、詩人は物語の冒頭から華麗な純愛の絵巻を読者の前に繰り広げてみせるのである。だがそれはトリスタンとイゾルデの物語ではなくて、トリスタンの両親、リヴァリーン (Riwalin) とブランシェフルール (Blanscheflur) の純愛物語である。「この前史は物語全体からみて、伝記的な導入機能をはるかにこえた意義をもつものになっている。ここに示されるものは、後になってトリスタンの本質的特徴の中に両親

から受けついで形で現われてくる諸々の能力と並んで、就中、序曲のように、ミンネ(愛)の抗しがたい、至福へ導びくが最後には破滅に陥れる力なのである⁷⁾とヴェーバー (Gottfried Weber) が指摘しているように、これはトリスタンの運命を暗示するかのような彼の両親の悲劇的純愛物語なのである。この両親の物語を分析することによって、ヴェーバーのいう「伝記的な導入機能をはかるにこえた意義」を具体的に照らし出してみたい。

(2)

- | | |
|--|--|
| <p>245 Ein herre in Parmenie was,
der jare ein kint, als ich ez las:
der was, als uns diu warheit
an siner aventiure seit,
wol an gebürte küenege genoz,
250 an lande vürsten ebengroz,
des libes schœne und wunneclich,
getriuwe, küene, milte, rich;
und den er vröude solte tragen,
den was der herre in sinen tagen
255 ein vröude berndiu sunne:
er was der werlde ein wunne,
der ritterscheffe ein lere,
siner mage ein ere,
sines landes ein zuoversiht:
260 an ime brast al der tugende niht,
der herre haben solte,
wan daz er ze verre wolte
in sines herzen luften sweben
und niwan nach sinem willen leben;
265 daz ime ouch sit ze leide ergie.
wan leider diz ist und was ie:
ufgendiu jugent und vollez guot,
diu zwei diu vüerent übermuot.
vertragen, daz doch vil manic man
270 in michelem gewalte kan,
dar an gedahte er selten;
übel mit übele gelten,
craft erzeigen wider craft:
dar zuo was er gedanchaft.</p> | <p>パルメニーエに一人の貴人がいて
年は若かったという話を私は読んだ。
その物語がわれわれに
実際語るところによれば、彼は
生れは王家に劣らず
領地は諸侯と等しく
その体軀の美しいこと、立派なこと、
誠実で勇敢、慈悲深くて有力、
彼がよろこびを与えねばと思う人には
この貴人は 終生
よろこびをもたらす太陽であった。
彼は世の人々の無上のよろこび、
騎上の鑑
彼の一族の名与
彼の領地の支えであった。
彼には貴人の備えねばならぬ徳のうち
欠けたものは一つもなかった。
ただ彼があまりにも
心の欲するままにおもむこうとし
彼の意のままに生きようとした点を除けば。
このことは又その後彼のわざわいとなった。
残念ながら今も昔も変らぬ世の常として
もえさかる青春とあふれる富
この二つは傲慢につながるゆえに。
多くの人が大きな権力もちながらも
耐え忍ぶことができるということに
彼はほとんど考え及ばなかった。
悪には悪で報い
力には力を示す⁸⁾
という考え方を彼はしていた。</p> |
|--|--|

以上のような書き出しでゴットフリートはトリスタンの父、リヴァリーンのことを語り始める。若く美しい勇敢な騎士英雄像を浮び上がらせながら、早々とリヴァリーンの悲劇的結末を指摘する叙述法の中に、すでに「プロローグ」でみてきた詩人の姿勢、「悦び」のうらに「苦しみ」を、「生」のうらに「死」を合せみるゴットフリートの目が感じとれる。そしてリヴァリーンの身に起ってくる「わざわい」の原因について、詩人は興味深い注釈を行うのである。

weiz got, der man muoz harte vil
 an disem borge übersehen
 280 oder ime muoz dicke schade geschehen.
 swer keinen schaden vertragen kan,
 da wahsent dicke schaden an
 und ist ein veiclicher site;
 hie vahet man den bern mite:
 285 der richet einzele schaden,
 unz er mit schaden wirt beladen.

天地神明にちかって申上げるが、人は
 加えられた害にも大低は耐えなければならない。
 さもなくば、大きな被害が降り掛るに違いない。
 一つの被害にも耐えることのできない人は
 それ故より大きな被害に出合わねばならない。
 これがまぬがれぬ掟である。
 熊がりもこんな理屈で行われるのである
 熊は仕掛けの罠に立ち向っては
 ますます罠に落ちこんでのびてしまうのだ。

このように注釈、付論のような形で挿入されてくる部分が、実はゴットフリートが顔をみせる瞬間なのである。ゴットフリートの「トリスタン」はトマ（Thoma）を原典とした忠実な翻訳であって、そのドイツ語訳の「言葉の魅惑的な音楽性」こそゴットフリートの功績であるという見方が初期のゴットフリート研究の段階では支配的であったが、最近ではこのような見方を越えてゴットフリートに対する新しい評価が試みられるようになった。その手掛りとなるのが、デ・ボーア（Helmut de Boor）の言葉を借りれば、「浸すことのできない原典を傍注と付論によって解釈する学識ゆたかな注釈」⁹⁾なのである。「プロローグ」はゴットフリートの人生観・人間観をもっともよく読者につたえるものであるが、同様に物語中に出てくるこのような注釈も、詩人を知るために見落すことのできない、しかも興味あふれるゴットフリートの表白なのである。

「悪には悪で報い、力には力を示す」ことのむなしさを知る詩人は、この注釈に引きつづいて、「私は彼にも同じことが起ったのだと思う、というのも彼は余りにも報復を常としたので、到頭そのために不幸を招いたのだ」¹¹⁾とリヴァリーンの運命に対して断を下している。このように英雄的騎士リヴァリーンを語る詩人の言葉は冒頭から悲哀にみち、つねに明と暗がその叙述につきまとう。

diu morgenliche sunne
 siner werltwunne,
 315 do diu von erste spilen began,
 do viel sin gæher abent an,
 der ime vor was verborgen,
 und laschte im sinen morgen.

彼のこの世のよろこびの
 朝の太陽の光が
 やっと輝き始めた時に
 それまで彼の目の前から姿を隠していた
 夕闇が突然たちこめ
 彼の朝の光をかき消した。

このような筆致でゴットフリートはトマの原典に拠ってリヴァリーンの、別名カネーレングレス（Canelengres）の短い生涯を語りつづける。リヴァリーンのその主筋にあたるモルガン（Morgan）公との報復のくり返しが結局リヴァリーンの若い生命を奪うことになってしまふのだが、その戦いが「やむを得ぬためだったのか、傲慢の故だったのか、私にはわからないが」¹²⁾と云い添えながら、詩人はその戦いを描いている。しかし「ゴットフリートが戦いの運・不運を少しの幻覚ももたずに見つめ、この騎士時代に、戦いの中で距離をおいて勝敗の不確かさを眺めている」¹³⁾ことが、次の詩句からも察せられるのである。

wan zurliuge und ze ritterschaft
 hæret verlust unde gewin:
 hie mite so gant urliuige hin;
 verliesen unde gewinnen
 370 daz treit die criege hinnen.

というのも戦いや騎士の生活には
 勝敗がつきものである。
 戦いとはこうしたものだ、
 負けたり 勝ったり
 戦いとはこれのくり返しなのだ。

現実を、時代を冷やかに観察し、そのおくに人生の無常を感得する詩人の姿がここにもくつきりと浮び上っている。

(3)

リヴァリーンはモルガンとの戦いに一旦は成功をおさめ、一年間の休戦が成立する。そこでリヴァリーンは、人望の高かったコーンウォールの若いマルケ (Marke) 王のもとに、「王から宮廷作法を学び、新しい騎士道を学び、自分の礼儀作法にみぎきをかけよう¹⁴⁾」と赴いていく。マルケ王は大歓迎で彼を迎え入れた。

Canelengres der was da wol
 510 des hoves, der hof der was sin vol:
 armę unde riche hæten in
 liep unde werden under in
 und enwart nie gast geminnet baz.
 ouch kunder wol geschulden daz:
 515 der tugenthafte Riwalin
 der was und kunde wol gesin
 mit libe und mit guote,
 mit gesellelichem muote
 zir aller dienste bereit.

カネーレングレスはその宮廷で居心地が大変よかつたし、宮中は彼への称讃に溢れていた。貧しい者も富める人も彼を愛し彼に敬服した、そしてどんな客人もこれほど愛されたことはなかった。彼も十分それに値したのである、徳操高いリヴァリーンは命と財産と友愛でもってすべての人々に仕える気持があつたしその術をこころえていた。

そうするうちにマルケ王は「かぐわしい五月がやってきて過ぎさるまでの、花さき乱れる四週間¹⁵⁾」に盛大な祝宴を催した。各地から騎士たちが美しい婦人を伴ってこの饗宴にはせ参じた。

Und Marke der guote,
 der höfsche hohgemuote
 anę ander vrouwen schonheit,
 630 dier hæte an sinen rinc geleit,
 so hæter doch besunder
 ein sunderlichez wunder,
 Blanscheflur sine swester da:
 ein maget, daz da noch anderswa
 635 schœner wip nie wart gesehen.
 wir hören von ir schœne jehen,
 sin gesæhe nie kein lebende man
 mit inneclichen ougen an,
 ern minnete da nach iemer me
 640 wip und tugende baz dan e.
 Diu sælige ougenweide
 diu machete uf der heide

そして善良なるマルケ王、この礼儀正しく高邁な人物は自分の回りに集めた美しい婦人たちのほかに、特別にたぐいまれな奇蹟彼の妹ブランシェフルールを伴っていた。どこの世界にもこれ以上美しい婦人は見られないような乙女、彼女の美しさについて聞いた話では彼女を心をこめたまなざしで見つめた男性は誰一人としてその後では前よりも女性と美德を愛さずにはおれなくなったということだ。この極楽の目の保養ともいべき人は野原にいる沢山の男性たちを

vil manegen man vrech unde vruot,
manc edele herze hohge muot.

大胆にし愉快にさせ
こころ気高い人々を有頂天にした。

この美しいブランシェフルールの前で騎士たちの紅白騎馬試合が始まる。リヴァリエンの一際目立つ立派な武者ぶりに美しい婦人たちの話題が集まり、「彼から喜びを与えられる女性はなんと幸せな人でしょう！¹⁶⁾」と噂し合う。

720 nu marcte ir aller mære wol
Blanscheffur diu guote,
wan sin ouch in ir muote,
swaz ir dekeiniu tæte,
ze hohem werde hæte;
725 si hæte in in ir muot genomen,
er was ir in ir herze komen;
er tuoc gewaltecliche
in ir herzen küniriche
den cepter und die crone:
730 daz si doch also schone
und also tougenlichen hal,
daz siz in allen vor verstal.

今やみんなの話に
善良なブランシェフルールも注目した。
というのも彼女も心中
みんなのいったことを
その通りだと思っていたので。
彼女は彼を心の中に迎え入れ
彼は彼女の心の中へ踏みこみ
堂々と
彼女の心の王国の
王位王冠を手に入れた。
だがこのことを彼女はまったく
秘密にして
みんなに知られないように隠した。

試合の後で偶然にリヴァリエンはブランシェフルールにフランス語で「お美しい方、神の恵みのあらんことを！¹⁷⁾」と挨拶を送ることになった。これに礼をのべながら、彼女は「私はあなたに貸しを返してもらわねばなりません¹⁸⁾」と謎めいた答えをする。訳をたずねるリヴァリエんに

si sprach: ‘an einem vriunde min,
755 dem besten den ich ie gewan,
da habet ir mich beswæret an.’

nein, der vriunt, des si gewuoc,
daz was ir herze, in dem si tuoc
von sinen schulden ungemach,
770 daz was der vriunt, von dem si sprach.
iedoch enwester niht hie mite.

彼女は答えた、「私の友のことで
私が今までに得た最良の人のことで
あなたは私をお苦しめになったのです」と。

いや、彼女が云った友とは、
彼ゆえに苦しむようになった
彼女の心のことであって
それが彼女のいうところの友であった。
だが彼はそんなことは何も知らなかった。

ブランシェフルールの謎めいた言葉をいろいろ考え倦んだ末、彼は「恋の道を指す¹⁹⁾」と思
い始めた。

daz enzunte ouch sine sinne,
daz si sa wider vuoren
und namen Blanscheffuoren
und vuorten si mit in zehant
810 in Riwalines herzen lant
und cronden si dar inne
im zeiner küniginne.
ja Blanscheffur und Riwalin,

それはまた彼の思いを燃え上らせ
その思いはすぐさまひき返すや
ブランシェフルールを抱きかかえ
彼女をつれてすぐさま
リヴァリエンの心の国へと引き返し
彼女をその国の
女王の位につけた。
まことブランシェフルールとリヴァリエン、

der künec diu süeze künigin,
 815 die teilten wól geliche
 ir herzen künicriche:
 daz ir wart Riwaline,
 da wider wart ir daz sine;
 und wiste iedoch dewederz niht
 820 umbe des andern geschicht.

王さまとやさしい女王さまは
 同じように
 その心の王国を分ち合ったのである。
 彼女のものはリヴァリーンのものとなり
 彼のものはその代り彼女のものとなった。
 だが二人ともたがいの
 身に起ったことを何も知らなかった。

ここでゴットフリートは恋に陥った者の、恋ゆえの苦悩、すなわち「こころ気高い人」に欠くことのできない「快い苦しみ」をリヴァリーンとブランシェフルールの上に見出している。リヴァリーンは彼女が自分を愛しているのか憎んでいるのかわからず、希望と疑いの間を揺れうごく。

895 so zwivel kam und seite im daz,
 sin Blanscheflur wær ime gehaz,
 so wancte er und wolte dan.
 zehant kam trost und truog in an
 ir minne und einen lieben wan:
 900 sus muose er aber da bestan.
 mit diseme criege enwiste er war:
 ern mohte weder dan noch dar.
 so er ie serre dannen ranc,
 so minne ie vaster wider twanc.
 905 so er ie harter dannen vloch,
 so minne ie vaster wider zoch.

疑いがやってきて 彼に
 ブランシェフルールはお前を憎んでいると云えば
 彼は動揺し立ち去ろうとした。
 とすぐに希望がやってきて 彼に
 彼女の愛を伝え期待をつながせた。
 そこで彼は再び立ち止まらねばならなかった。
 こんな争いに彼はどっちへ行くべきか解らなかった。
 引くことも進むこともできなかった、
 立ち去ろうと激しくもがけばもがくほど
 ますます強く恋が彼にのしかかり
 そこから逃れようとすればするほど
 ますます強く恋が彼を引きもどした。

リヴァリーンはこれまで「心からの愛がこんなに苦しみと背中合せのものだ²⁰⁾」とは知らなかったが、

wan er greif in ein ander leben;
 ein niuwe leben wart ime gegeben:
 er verwandelte da mite
 940 al sine sinne und sine site
 und wart mitalle ein ander man;

今や彼は新しい生活をとらえ始めた
 新しい生が彼に与えられた
 それとともに彼は
 彼の生き方や習慣を全て変えてしまい
 まったく別人となったのである。

恋の洗礼によってリヴァリーンが生れかわったことを詩人はこのように強調している。

恋の洗礼をうけて生活が一変したのは、ブランシェフルールも同じであった。

diu gewaltærinne Minne
 diu was ouch in ir sinne
 ein teil ze sturmliche komen
 und hæte ir mit gewalte genomen
 965 den besten teil ir maze.
 * * * * *
 972 ir leben enschuof sich niuwan so,
 als ez ir an der not gewac,
 diu nahen an ir herzen lac.

強大な力をもつ恋の女神は
 彼女の心の中へも
 嵐のように押しよせ
 彼女の心の平静さをほとんど全部
 力づくで奪ってしまった。
 * * * * *
 彼女の生活は ただもう
 彼女の心にびったりと寄りそう
 苦悩にふさわしいものとなった。

彼女は自分の変化の原因はリヴァリーンにあることを自覚する。そして告白するのである、「多くのところ気高い人々を、快い苦しみでなやませる快い心の苦しみが、私の心の底によこたわっている²¹⁾」と。このブランシェフルールの告白の中に、ゴットフリートが「プロローグ」において「ところ気高い人」の属性の一つとして指摘した「快い苦しみ」というテーマが語られていることに注目しなければならない。リヴァリーンとブランシェフルールのミネネは、この先展開されるトリスタンとイゾルデのミネネと同等の、ゴットフリートの理想と考える典型的な愛の姿であることがこの告白からも理解されるのである。

ブランシェフルールはリヴァリーンが「彼女の最大の希望、最良の命²²⁾」であることを自覚した今、彼女は熱い眼差で彼をしげしげとみつめる。この思いはすぐさま彼の心に通じ、「恋人同士が互の目を見つめ合えば、恋の火には燃え上らせる油をそそぐようなもの²³⁾」という諺通りの結果になった。

(4)

しかしこの恋人たちを悲しい運命が待ちかまえていた。マルケ王の祝宴が終り、列席した騎士たちが帰途についた時、王のもとへ敵が侵入してきたという知らせがもたらされた。直ちに王は大軍を召集し、敵との戦いに勝利をおさめたのであるが、「その時高貴なリヴァリーンは槍で脇腹をさされ、重傷を負った²⁴⁾」のである。彼が頻死の重傷を負ったという噂はすぐに国中にひろまった。

1150 si clageten, daz sin vrūmekeit,
sin schœner lip, sin sūeziu jugent,
sin wol gelobetiu herren tugent
so schiere solte an ime zergan
und ein so vrūejez ende han.

人々は嘆いた、彼の勇敢さ
彼の美しい体軀 彼の素晴しい若さ
彼の称讃される貴人としての徳が
こんなに早く彼と共に消え
こんなに早く終ってしまうとは と。

その中で一番嘆き悲しんだのは勿論ブランシェフルールであった。

1185 und wære iedoch verdorben
und in dem leide erstorben,
wan daz si der trost labete
und der gedinge uf habete,
daz sin binamen wolte sehen,
1190 swie soz möhte geschehen;

きっと彼女は破滅し
苦しみのあまり死んでいたことであろう、
何がおきようとも
彼にほんとに会いたいという
慰めに勇気づけられ
希望をもちつづけていなければ。

リヴァリーンに一目会いたいというブランシェフルールの願いは彼女の^ト傳育女官の策略で実現することになる。ブランシェフルールは貧しい乞食女の着物をきせられ、重傷のリヴァリーンのところへ手引きしてもらうことになった。この密会の場を描き出す詩人の言葉はまことに美しい。愛の詩人ゴットフリートの面目躍如たるものがあるので、長くなるが引用しておこう。

Alsus neigir do Riwalin
vil kume, als ez do mohte sin

そのとき彼女に向ってリヴァリーンは
力をふりしぼり

von eime totsiechem man.
 ouch sach si daz vil lützel an
 und nam es harte cleine war,
 wan saz et blintlichen dar
 und leite Riwaline
 ir wange an daz sine,
 1295 biz daz ir aber do beide
 von liebe und ouch von leide
 ir libes craft da von gesweich:
 ir rosevarwer munt wart bleich,
 ir lich diu kam vil garwe
 1300 von der vil lichten varwe,
 diu da vor an ir libe lac;
 ir claren ougen wart der tac
 trüebę unde vinsten als diu naht.
 sus lac si in der unmaht
 1305 und ane sinne lange,
 ir wange an sinem wange,
 geliche als ob si wære tot.
 Nu daz si do von dirre not
 ein lützel wider ze crefte kam,
 1310 ir trut si an ir arm do nam
 und leite ir munt an sinen munt
 und kuste in hundert tusedt stunt
 in einer cleinen stunde,
 unz ime ir munt enzunde
 1315 sinne unde craft zer minne,
 wan minne was dar inne:
 ir munt der tet in vröudehaft,
 ir munt der brahte im eine craft,
 daz er daz keiserliche wip
 1320 an sinen halptoten lip
 vil nahe und innecliche twanc.
 dar nach so was vil harte unlanc,
 unz daz ir beider wille ergienc
 und daz vil süeze wip enpfienc
 1325 ein kint von sinem libe.
 ouch was er von dem wibe
 und von der minne vil nach tot;
 wan daz im got half uz der not,
 son kunder niemer sin genesen:
 1330 sus genas er, wan ez solte wesen.

顔死の人に可能な限りのおじぎをした。
 彼女はそれをほとんど目にもとめず
 ほとんど気もつかなかった、
 ただもう盲めっぽうそこへしゃがんで
 リヴァリーンの頬に
 自分の頬をすりよせ
 とうとう最後にはその場で
 愛のため苦しみのため
 彼女の体から力がつき果てた。
 彼女のばら色の口唇は青ざめ
 その顔色はまったく失われていた、
 この直前まで彼女の体をおおっていた
 とても明るかった色が。
 彼女の澄んだ目の日の光は
 夜のようにくもり暗くなってしまった。
 このような姿で卒倒し
 ながく気を失って
 彼の頬に自分の頬を重ね合わせ
 死んだように横たわっていた。
 だが この危機からふたたび
 わずかに力を取りもどしたとき
 彼女は恋人を腕に抱いて
 その口唇に口唇を重ね
 なん百回もなん千回も
 短い間に口づけをかさね
 とうとう彼女の口唇は 彼の
 気力体力を燃え上らせ愛へとかりたてた、
 何故なら愛がその口唇には宿っていたから。
 彼女の口唇は彼に歓喜を与え
 彼女の口唇は彼に力を与えたので
 彼はこのすばらしい婦人を
 その顔死の体に
 ぴったりとやさしく抱きしめた。
 その後長くはかからなかった、
 彼ら二人の思いが遂げられ
 このとても愛らしい婦人が
 彼の子供を身籠るまでに。
 まったく彼はこの婦人のため
 この愛のため死ぬところであったのだが。
 神がこの危機から彼を救わなければ
 決して回復できなかったであろう。
 こうして彼は回復した、そう定められていた故に。

プランシェフルールと顔死のリヴァリーンの生命の危機を賭けてのはげしい愛の燃焼を、
 このように美しく描き上げた詩人には、トリスタンの誕生をこのはげしい愛の燃焼の結実と
 して読者につよく印象づけておこうという意図があったと思われる。

二人の激しい愛の前では神の加護すら与えられ、リヴァリーンは生命の危機を脱したと語り
 りながらも、詩人は次の筆で「彼女はそこに憧れゆえの心の悩みを置き去り、そこから死を

伴ってきた、彼女は愛によって悩みを置き去り、子供と共に死を受け取った²⁵⁾と語り、早くも二人の暗い運命を予告する。しかし彼ら二人はそのような暗い運命が待ちかまえていることは知る由もない。彼らは今つかの間の至福にひたるのである。

<p>1356 si hætten in ir sinnen beid eine liebe und eine ger: sus was er si und si was er, er was ir und si was sin;</p>	<p>彼らは二人ともその心の中に 一つの喜びと一つの望みを抱いていた。 こうして彼は彼女であり、彼女は彼であった。 彼は彼女のものであり、彼女は彼のものであった。</p>
---	---

こういう表現でゴットフリートは、リヴァリーンとブランシェフルールの「神秘的な愛の一体化の現象²⁶⁾」を描いている。

(5)

だがこうした愛の至福は「長くは続かなかった」とゴットフリートは述べている。すなわち、リヴァリーンのもとに国許から宿敵モルガンが攻撃してきたという知らせが届き、リヴァリーンは帰国しなければならなくなる。ブランシェフルールの嘆きが再び始まった。彼女の嘆きの余りにも大きいことを知ったリヴァリーンは、喜びの時に一体化したように、苦しみの際にも彼女と一体化しようと決心する。

<p>vrouwe, ich wil iu rehte sagen min herze und allen minen muot: leit unde lieb, übel unde guot 1525 und allez daz, daz iu geschicht, da von enscheide ich mich niht: da wil ich iemer wesen bi, swie kumberlich ez danne si, und biute iu zweier dinge kür, 1530 diu leget iuwerm herzen vür: weder ich belibe oder var.</p>	<p>「姫君、私はあなたに卒直に わが心の思いの全てを申し上げます。 苦しみも喜びも 悪も善も あなたの身に起る全てのことから 私はのがれはいたしません。 いつでもお側にいるつもりです たとえどんなに辛くとも。 そしてあなたに二つの選択を願います あなたのお心のままです 私が留まるのも、出発するのでも」</p>
--	--

このリヴァリーンの誠意にうたれたブランシェフルールは彼の帰国に同道する決心をし、夜陰にまぎれてこっそりと彼の帰国船に乗ったのである。

こうして故国に帰ってきたリヴァリーンに、留守を託されていた忠実な將軍ルアール(Rual)は敵に攻められている窮状を報告すると共に、ブランシェフルールのことを聞いて心からの祝辞をのべる。

<p>‘iuwer ere wehset alle wis, iuwer werdekeit und iuwer pris, 1615 iuwer vröude und iuwer wunne diu stiget als diu sunne. irn möhtet uf der erden von wibe niemer werden so hohes namen als von ir.</p>	<p>あなたのご名譽はどんな点でも高まり あなたのご人望とご名声 あなたのお喜びとお幸せは 太陽のように昇ってまいります。 あなたはこの地上であの方ほどには ほかのどんなご婦人によっても ご高名になられることはございません。</p>
--	--

そして経験にとんだルアールは、当面の難題が片付き次第、結婚式をとり行い教会でその結婚に祝福を与えてもらうようリヴァリーンに忠告するのであった。この忠告通りに事はすめられ、花嫁ブランシェフルールはルアールの妻の手にゆだねられ戦争の終るまで夫の帰りを待つことになった。

しかしモルガンとの戦いは、「そこで命びろいをしたのはなんと少数であったことか、そこではなんと多くの者が窮地に陥ったことか。双方の兵のなんと多くの者が倒れて死んだり傷ついたことか」と述べられているように、悲惨をきわめた。そしてリヴァリーンも「そこで痛ましい死を遂げた」²⁹⁾のである。

このリヴァリーンの前死の場面で注目しなければならないのは、次のようなゴットフリートの注釈が挿入されていることである。

daz ich nu vil von ungehabe
 1695 und von ir jamer sagete,
 waz iegelicher clagete,
 waz solte daz? es wære unnot.
 si waren alle mit im tot
 an eren unde an guote,
 1700 an allem dem muote,
 der guoten liuten solte geben
 sælde und sæleclichez leben.
 Diz ist geschehen, ez muoz nu sin:
 erst tot der guote Riwalin;
 1705 dan hœret nu niht mere zuo
 wan eine, daz man umbe in tuo
 als mit rehte umb einen toten man.
 dan ist doch nu niht anders an:
 man sol und muoz sich sin bewegen,
 1710 und sol sin got von himele pflegen,
 der edeler herzen nie vergaz!

私がどんなにみんなが悲しんでいたかと
 いろいろその嘆きについて
 彼らの悲しみについて語ったとて
 それが何になろう、無駄なことではないか。
 彼らは全て彼と共になくしてしまった
 名誉も財産も
 すべての勇気も。
 それは善良な人々に
 幸運と幸せな生活を与えるはずであったのに。
 これは起ってしまった事だ。今更仕方がない。
 立派なリヴァリーンは亡くなった
 今やもう何の手立もない、
 ただ彼のために
 死者のために当然なされる事をする以外には。
 だって他にどうしようもないのだ。
 彼のことは諦めねばならない。
 気高い心を決してお忘れにならない天の神が
 彼をお引きうけ下さらんことを!

この「シニカルなひややかさ」³⁰⁾をおびた詩人の注釈はまことに興味深い。すでに引用した366行から370行までにも、騎士時代の戦いを常とした社会にあって詩人が戦争の勝敗をひややかに眺めていたことと思わせると、ゴットフリートは「騎士の世界を外から観察し、その世界の美しい、余りにも美しい輝くばかりの表面を、仮面をはぐべき、妄をさますべき幻影とみている」³¹⁾というケーファーシュタイン (Georg Kefenstein) の指摘がここでも首肯できるのである。

そして戦争のむなしさをひややかにみつめた詩人は、その最大の犠牲者としてブランシェフルールの悲劇を語るのである。

do diu vil schœne vernam
 1715 diu clagebæren mære,
 wie do ir herzen wære,
 got herre, daz solt du bewarn,
 daz wir daz iemer ervarn!

あの大変美しい人が
 この悲しむべき出来ごとを聞いたとき、
 彼女の心はどんなであったろうか。
 神よ われらを守りたまえ
 常にこんな苦しみに出会いませぬように!

詩人をしてこのように神に祈らずにはおこななかったブランシェフルールの痛ましい悲劇、それは「彼女の心が石となってしまう」³²⁾涙も流さず、嘆きもせず、倒れたまま四日間の苦しい陣痛の末男の子を産んだのであるが、「ところがその子は生き残り、彼女は死んでしまった」³³⁾という悲しい運命である。

- | | |
|--|---|
| <p>1751 O we der ougenweide,
da man nach leidem leide
mit leiderem leide
siht leider ougenweide!
*****</p> <p>1765 sin tot was aber wol lobelich,
der ir ze sere erbermeclich.
swie schedelich diu swære
liute unde lande wære,
diu von ir herren tode kam,</p> <p>1770 ezn was doch niht so clagesam,
so daz man dise quelende not
und den erbermeclichen tot
an dem vil süezen wibe sach.
ir jamer unde ir ungemach</p> <p>1775 beclage ein ieclich sælec man;
und swer von wibe ie muot gewan
oder iemer wil gewinnen,
der trahte in sinen sinnen,
wie lihte misselinge</p> <p>1780 an sus getanem dinge
guoten liuten uf erstat,
wie lihte ez in ze leide ergat
an vröuden unde an libe,
und si dem reinen wibe</p> <p>1785 genaden wünschend umbe got:
daz sin güete und sin gebot
ir helfe, ir trost geruoche sin!</p> | <p>おお何という悲しい光景であろう、
痛ましい悲しみの後で
一層いたましい悲しみをともなって
一層いたましい光景を目撃するとは、

彼の死は栄光に包まれていたが、
彼女のそれは余りにも痛ましかった。
領主の死から生じる
領民領国の苦難が
どんなにひどいものであっても、
これほど嘆かわしいことはなかった
この大変美しい婦人の
苦しい悩み
痛ましい死をみるほどには。
彼女の悲しみと彼女の不幸を
恵まれた人はだれでも 悼みたまえ！
婦人から幸せを手に入れた人も
またいつも手に入れたいと望んでいる人も
とくと考えたまえ、
どんなにたやすく不幸が
こういう具合に
善良な人々の身の上に乗ってくるかを、
どんなにたやすく彼らの悦びや人生が
苦悩に変じてしまうかを。
そしてこの清らかな婦人のために
神に加護を祈りたまえ
神の慈悲とお力によって
彼女が救われ慰められるようお願いたまえ！</p> |
|--|---|

ブランシェフルールの悲惨な最期について、このような注釈をつけながら詩人は読者に対して、「婦人から幸せを手に入れた人も、またいつも手に入れたいと望んでいる人も」、すなわち愛によって幸せを望む人は、いつその「悦び」が「苦悩」に一変してしまうかをよく熟考するよう警告している。この警告には、人生の無常をひややかにみつめる詩人の炯眼と、騎士の華々しい武闘のかげで運命を狂わされる善良な人々、とくに女性たちに対する憐憫のまなざしが感じられる。

以上筆者の拙訳によって、トリスタン物語の第一章として展開された「リヴァリーンとブランシェフルール」の物語を分析してきたのであるが、ゴットフリートがトリスタンの誕生について読者に物語ろうとしながらも、その目的をはるかにこえた一つの美しい純愛の姿を読者に提供しようとしたことは明らかであろう。しかも「プロローグ」で述べられた、愛にあっては「悦び」と「苦しみ」は切り離すことができないという詩人のミネ観、こういう

ミネを体験せずして「こころ気高い人」は生まれないという人間観、そして「生」のうら
につねに「死」をみる人生観があいまって、リヴァリーンとブランシェフルールの「至福へ
導びくが、最後に破滅へ導びく」純愛を鮮かに描き出したということができよう。

註

- 1) ゴットフリートの「トリスタンとイゾルデ」プロローグ47行から49行 論集23巻拙訳参照
- 2) 同60行から63行
- 3) 同73行から76行
- 4) 同127行
- 5) 同187行から194行
- 6) 同205行から217行
- 7) Gottfried Weber : Gottfried von Strassburg Tristan Text Nacherzählung Wort-und Begriffs-
erklärungen 1967 S. 552
- 8) ドイツ語引用は上記の G. Weber のテキストによる。
- 9) Helmut de Boor : Geschichte der deutschen Literatur 1966 S. 130
- 10) de Boor : *ibid.*, S. 130
- 11) 引用287行から289行
ich wæne, ouch ime alsam geschach,
wan er sich alse vil gerach,
biz er den schaden dar an genam.
- 12) 引用342行から343行
weder ez do not ald übermuot
geschüefe, des enweiz ich niht,
- 13) G. Weber : *ibid.*, S. 555
- 14) 引用457行から459行
und von im werden tugenthaft
und lernen niuwan ritterschaft
und ebenen sine site baz.
- 15) 引用538行から540行
die blüenden vier wochen,
so der vil süeze meie in gat
unz an daz, da er ende hat,
- 16) 引用718行から719行
o wol si sæligez wip,
der vröude an ime beliben sol!
- 17) 引用743行
'a, de vus saut, bele!'
- 18) 引用750行から751行
und aber des rehtes unverzigen,
des ich an iuch ze redene han.
- 19) 引用802行
uf den wec der minne wegen:

- 20) 引用919行から920行
daz herzeliebe wære
so nahe gende ein swære.
- 21) 引用1073行から1076行
der süeze herzesmerze,
der vil manic edele herze
quelt mit süezem smerzen,
der liget in minem herzen.
- 22) 引用1083行
in meister trost, ir beste leben:
- 23) 引用1116行から1118行
swa liep in liebes ouge siht,
daz ist der minnen viure
ein wahsendiu stiure.
- 24) 引用1135行から1137行
da wart der werde Riwalin
mit eime sper zer siten in
gestochen und so sere wunt,
- 25) 引用1337から1340行
si lie senede herzenot
und truoc mit ir von dan den tot:
die not si mit der minne lie,
die not si mit dem kinde enpfie;
- 26) G. Weber : *ibid.*, S. 570
- 27) 引用1373行
Doch werte daz unlange;
- 28) 引用1672行から1675行
wie lützel der da wart gespart!
wie manic man kam da ze not,
und wie vil maneger lac da tot
und wunt von ietwederm her!
- 29) 引用1685行
der lac da jæmerlichen tot.
- 30) G. Weber : *ibid.*, S. 574
- 31) Georg Kefenstein : Die Entwertung der höfischen Gesellschaft im „Tristan“ Gottfrieds von
Strassburg, GRM 24, 1936, S. 425
- 32) 引用1730行
da was ir herze ersteinet:
- 33) 引用1750行
seht, daz genas und lac si tot.

ゴットフリートの「トリスタンとイゾルデ」

その他の参考文献

Kürschners Deutsche National-Literatur 4. Bd.

Tristan und Isolt (edited by A. Closs Blackwell's German Texts 1965)

Tristan (translated by A. T. Hatto Penguin Books 1972)

トリスタンとイゾルデ 石川敬三訳 郁文堂 1976